◎こじんまり復活！ 機関誌「大道無門」名称改め・・・

空道無門

KUDOMUMON VOL.8

かつて、空道専門誌として存在していた立派な雑誌「大道無門」。
格闘技全般を扱う雑誌すらすべて廃刊となる時代だけに、もちろん、今は発行されていませんが…。
「やっぱり紙で、大道塾や空道の企画記事を残して欲しい」というリクエストが多く寄せられたことで、こじんまり復刊！　年2回、春・秋に発行される全日本大会パンフレット内にて、掲載いたします。

2017 体力別全日本選手権 展望

2年後の世界選手権への選考レースがスタート。東京で初めて〝最高峰の空道の技術〟が披露される

【総　論】

〝北斗旗〟が81年に初開催されて以来30年近くになるが、階級別全日本選手権が東京で開催されたことは、過去に一度もなかった。階級別全日本選手権は大会主管団体大道塾の発祥地・仙台で行い、東京では無差別全日本選手権を行うというのが、通例だったのである。一方でこの30年近くの歳月の間に、武道スポーツにおいては、選手たちが最大の目標とする大会が無差別から階級別に変化してきたのも事実。柔道や空手にしろ、かつては〝無差別で勝つことこそが男のロマン〟といったアティテュードがあったが、今や無差別大会はお祭り的な、我が国独自のドメスティックイベントとなりつつある。空道においても、世界選手権をはじめとした国際大会が男女・階級別で行われることもあって、もはや、体力別大会こそが選手にとっての本分。つまり、近年、実力が拮抗した闘い、その時点での空道の最高レベルでの技術戦は、東京では見られることがなかったのだ。今大会以降2年間の全日本選手権の結果によって、2019世界選手権日本代表が決まることもあり、これまでの2年は実力を温存し、今大会からピークパフォーマンスを発揮する選手も多いに違いない。東京でのみ来場するマスコミや格闘技・武道関係者も多いことを考えれば、現時点の最高峰の空道の技術が披露されるこの2017全日本体力別選手権は、エポックメーキングな大会といえるだろう。

【各階級展望】

−230クラス

2015、2016年と全日本−230クラス連覇、2015無差別準優勝、2016無差別では体力指数で70上回る野村幸汰を相手に牛若丸の如き闘いをみせた**目黒雄太**が独走するか？　対抗馬となるのは目黒とともに2014世界選手権に出場したメンバー、**谷井翔太**。一昨年、目黒と全日本の決勝を争った**田中正明**のボクシングテクニック、昨年、目黒と全日本の決勝を争った**近田充**の受け流す組手、一昨年全日本無差別ベスト8の**小芝裕也**の出入りの激しいスタイルも侮れない。一方で、彼ら実績をもつ者たちを、西日本地区予選を制した20歳・**高垣友輝**、東北地区予選準Vの18歳・**菊地逸斗**のU19カテゴリーからの昇格組が越えていく可能性も十分にある。ちなみに、この階級には今大会出場選手のうち最年長となる54歳の**渡辺慎二**と**上野正**が出場しているが、18歳の菊地とは36歳差ということになる。ダークホースはムエタイで実績を残し、大道塾札幌西支部で指導を行っている**ソムチャイ・ヌアナー**。北海道地区予選で唸りをあげた蹴り技は、目黒をも捕えるか。

関東地区予選決勝。跳び上段膝蹴りで上野から効果ポイントを奪った谷井▲

−240クラス

前回世界選手権に出場するもベスト4にも入れず敗れた**内田淳一**と、前回世界選手権でリザーバーに選出されながら出場の機会のなかった**巻礼史**が、その悔しさを晴らすべく、カムバック。担ぎ技のキレる両者を迎え撃つのは、彼らが不在の間にこの階級のチャンピオンとなった二人、MMAスタイルの**田中洋輔**、史上最年少全日本優勝記録保持者でハイキックの切れる**川下義人**（2年前の優勝当時18歳、現在20歳）だ。この4名以外にも、ジュニアクラスで優勝歴のある**伊東宗志**（20歳）、関東地区予選優勝を争ったムエタイスタイルの**神代雄太**（25歳）と**服部晶洸**（26歳）、東北予選優勝の**伊東駿**（25歳）らが世界出場枠戦線に食い込んでいく可能性は高い。

①

②

③

▲関東地区予選決勝、神代（下）vs服部。グラウンドで、服部が神代をスイープした瞬間、下からのキック（①→②→③）を神代が放ち、効果ポイントを得た。

ー250クラス

関東地区予選では、清水亮汰より1歳下、岩﨑大河より1歳上の20歳で、二人とともに総本部で寮生活を送りながら実績において両者に遅れを取っていた**山崎順也**が、一昨年、セーム・シュルト以来19年振りの大道塾外団体所属の全日本王者となった**加藤智亮**を下して優勝。このまま山崎が波に乗って全日本を制するかといえば、加藤はもちろんのこと、アレクセイ・コノネンコから事実上のKOを奪った実績をもつ**笹沢一有**、日本拳法仕込みの右ストレートを武器に2015全日本決勝で加藤とポイントを奪い合う接戦を演じた**藤田隆**、悲願の初優勝を狙うベテラン**服部宏明**、スマートな闘いぶりに定評のある**野田洋正**、そして山崎と同い年で北海道のジュニア大会を争ってきた**安富北斗**らも、黙ってはいないだろう。

▲関東地区予選決勝、加藤がハイキックで攻めれば(①)、山崎は豪快な内股で投げ切る(②)。判定5ー0で山崎が勝利した

ー260クラス

昨年、ー250クラスを初制覇した**清水亮汰**が早くも階級を上げた。登録名簿をみれば、体重は83キロ、体力指数はこのクラスリミットの260となっている。18歳で彗星の如く現れ、世界選手権で準優勝した頃は線の細さが目立ったが、3年の大道塾総本部寮生活で、真っ向勝負でも海外勢に当たり負けしない、厚みある身体が出来上がったようだ。今春、卒寮し、引き続き、職員として大道塾事務局にて勤務することとなった清水、国内では、ー260で闘いつつ、国際大会では10キロ体重を落として一250クラスでの世界制覇を狙う意向のようなので、期待は大きい。立ちはだかるは、2014世界選手権一270クラスベスト4で、昨年無差別においては優勝した野村に最終的には寝技で敗れたものの、打撃では追い込んでいた**辻野浩平**。両者の間には、もともとは2階級の差があっただけに、どのような展開となるのか、興味深い。一方、テクニカルにはみえない無骨なスタイルながら、昨年、一昨年と2年連続で全日本無差別でベスト4入りしたことで実力を証明した**押木英慶**も侮れない。この3人を追うのは、前回世界選手権で日本代表最終選考まで残っていた**伊藤新太**か。ただし、柔道やブラジリアン柔術の基本とはひと味違う、独特の寝技技術をもつ**渡部秀一**は、どんな相手からも一本を奪う可能性を秘めているだけに、誰がその落とし穴にはまるかで、トーナメントの行方は、大きく変化するだろう。

▲一昨年2015年の全日本無差別では、体力指数で55上回る野村を打撃で退けた清水。今回優勝すれば、21歳にして全日本3階級を制したことになる

+260クラス

昨年秋、遂に全日本無差別王者となった**野村幸汰**。しかしながら2月に開催された空道ワールドカップでは、初戦でまったくの空道後進国であるインドの選手の打撃で有効を先取され、相手の反則に救われ勝利したものの、準決勝は延長判定勝利、決勝はロシア人にパンチで効果を奪われての敗戦と、冴えなかった。確かに打撃の技術は徐々に伸びてはいる。しかし、その〝伸び率〟にかんして「柔道で実績を持つ選手がセカンドキャリアで、それも重量級組み技競技者ならではの太めの体型で、よく頑張っているじゃないか」と捉えるか「大道塾職員として取り組んでいる者の中では、格闘技経験ゼロで始めてキャリア2年でもっと巧くなっている人は多い」と捉えるか、意見は分かれるところ。果たして、今大会では、厳しい意見を封じ込めることができるか?　判断材料となるのは、タイガードを固めることに頼るのではなく、相手の攻撃に反応して対処することができるか?という点だろう。重いローキック、膝蹴りなど、攻撃には十分な説得力がある。課題はディフェンスなのだ。昨年、野村とこのクラスの全日本決勝を争った19歳の**岩﨑大河**、無差別での闘いを好み、最重量階級にエントリーしてきた2014&2016の−260全日本王者・**加藤和徳**はいずれも、上下への打撃を速く繋げるタイプなので、どう対応するか、注目したい。この3強以外では、キレイな組手を好む相手を突進ファイトで潰す**五十嵐健史**がいかに引っ掻き回すかにも、期待したい。

関東地区予選で五十嵐(下)の突進をガッチリ受け止め、投げてはバックマウントからのキメ突きを入れる岩﨑▶

女子クラス

2月に行われたワールドカップで日本人として唯一人、優勝を果たした**大谷美結**。日本人女子初の国際大会優勝者となったわけでもあり、日本女子空道のエースの座を不動のものとしつつある。東海大柔道部では団体戦メンバーとして闘った経歴を持ち、相手を引き出しての小内刈をはじめ、組み技においては圧倒的な力量をみせるこの大谷に、2015年春の初回対戦では勝利し全日本王者となったものの、2015年秋、2016年春秋と、全日本の舞台で3連敗している**今野杏夏**、2016年全日本決勝で敗れた**東由美子**は、前回対戦時より進化した姿をみせられるか?　軽量ブロックでは、20歳にして10年のキャリアを持ち、打撃から寝技まで万遍なく巧さをみせる**大倉萌**がそろそろ一般部の上位に進出してもおかしくないと思われるが、その大倉を昨年秋の全日本で、気合いの突進で下した**西川麻理恵**、効果ポイント奪取率の非常に高い上段横蹴りをもつ**小柳茉生**の包囲網を越えねばならない。

▲関東地区予選での小柳の上段横蹴り。U19のトーナメントでも相手をなぎ倒してきた得意技だ

▲関東地区予選で優勝した東由美子を囲んで、父である東孝・大道塾塾長と、母である東恵子・同事務局長。昇級審査で4度、娘を保留にしてきた塾長も、この日ばかりは嬉しそう

空道　気になるあの人に訊く・・・・・

第6回

神山歩未

Ayumi Kamiyama

+270の闘いに割って入る女性主審は、空道女子競技の歴史とともに歩んだ開拓者

昨年の全日本無差別にて

身長185センチ、体重100キロ以上の猛者がひしめく+270クラス。その主審を身長155センチの小さな女性が務めることがある。「待て!」。激しいぶつかり合いに、毅然と割って入るその姿は、実に凛々しい。なぜ、彼女はそこにいるのだろう?　長き道程を語ってもらった。

— — どういう経緯でこの道へ?

神山　道着を着始めたのは6歳とか7歳のときなのですが、大道塾をやっている親(神山信彦・愛知県日進支部支部長)の元に生まれてきてしまったので、それ以前から道場が遊び場で、観る映像は北斗旗のビデオでした。

— — アニメではなく、殴り合い(笑)。三人姉妹で、3人とも空道全日本選手権で優勝か準優勝の成績を残している……その長女なんですよね。ご両親は、男の子でも女の子でも空道をやらせようという方針だったのでしょうか?

神山　どうなんでしょうね?　たぶん、父は空道を格闘技としてでなく、教育として捉えていて、人として生きていくのに一本筋の通った武道が必要だろうと、だから、男女関係なくやらせるっていう考えだったと思います。

— — ある日、突然「今日から稽古に参加しろ」とかって言われたのでしょうか?

神山　いや、まったく記憶にないです。スーパーセーフ面で宇宙飛行士ごっこをしたり、サンドバッグに抱きついてぶら下がってコアラごっこをしたり…幼少期から道場で育ったので…。

— — 覚えてないくらい自然に道場にいた?

神山　はい。父…支部長が拳立てをするときに「背中に乗れ」とか、そういう感じで。

— — スーッと楽しく溶け込むように?

神山　いや「楽しく」と言うと、語弊があるかもしれません。その家庭に生まれてしまったために、やめるという選択肢がなかったんです。……オリンピック前に吉田沙保里さんの特集のインタビューを観て「同じだぁ〜」って、姉妹で号泣したことがありました。彼女の場合はお父さんが竹刀を持ってましたけど、我が家の場合は物差しでした。稽古中に弛んでたりしたら、家に帰ってから「座れ!」と言われて、姉妹が並んで正座しているところに竹の物差しがビシッと。

— — 厳し過ぎてトラウマにはならなかった?

神山　支部長の指導は感情的でなく、理に適った厳しさだったから、納得せざるを得なかったです。稽古について、コノネンコ(・アレクセイ)先輩が「歯磨きと一緒」っておっしゃっているのを聞いて、そうだな、と思いました。面倒くさいけど、やらないと気持ち悪いという感じです。今でも怖いとは思っています。

— — キャリアが20年以上になる今でも…。…正確にいうと、何年に始めてキャリア何年になるんでしたっけ?

神山　小1…6歳くらいからはじめて32歳になるので、91年くらいから始めたということになると思います(空道歴は25年くらい)。91年くらいに大道塾中部本部ができる、その前に露橋スポーツセンターで稽古が行われていた頃、一般部の後ろに混ざり、基本稽古や移動稽古に参加していました。

— — 当時、誇らしい気持ちでした?　それと女の子らしい習い事をしたかった?

神山　稽古が生活の一部になっていたから、何も意識していなかったんです。「私、朝・昼・晩とごはんを食べるよ」と友達に言わないじゃないですか。だから、誰かに蔑まれた記憶もないですし、誰かに自慢した記憶もないです。ただ、高校くらいになってからは、葛藤が生まれてきました。何らかの部活に入ることを求められるじゃないですか。自分は部活で何かに打ち込むことなく、空道をやっていたので、学校の先生に理解が得られないところがありました。

— — 一方で、当時は、空道では、女子競技は行われていなかったですよね?

神山　なかったですね。少年部(小学生)の試合は男女混合だったので、白帯の時から、男子の中に混じって試合していました。「お母さん、怖い」って心の中で思いながら。入賞も出来なかったんですが、ベストファイティング賞という賞を頂いたことは、今でもよく覚えています。

— —その後、中学・高校と、女子競技がない中で、稽古を続けた理由は?

神山　もともと、将来を見据えて、弱い自分に勝とうとか、教育的なかたちの指導を受けていましたから、試合に出て結果を残そうとか、スポーツ的感覚ではなかったので。それに一方で、大道塾の試合がない代わりに、いろんな他流派の大会に連れて行かれはしてたんです。魚本流だとか、顔面突き禁止のルールの試合に出場したりしていました。

— — で、空道の全日本優勝が2010年。25歳ですよね。それまでの間は?

神山　高校2年のとき、第1回世界選手権で、岡(裕美==2006秋全日本優勝)先輩と八島(有美=元女子プロボクシング日本王者)先輩がワンマッチで試合しておられて、女子でもこういう場があるんだということを意識できて……ただ、実は……このことが今に繋がるのですが、女性の方が一人、エキシビションの少年部の試合の審判をやっていらっしゃって、カッコいいなって思って。家族でも「女性審判、かっこいいね!」って話になって、審判になるためには黒帯を取らなきゃいけないし、それなりに選手として試合経験を積まねば、と。

— — 選手でなく、審判をみて、競技に身が入るようになった!?

神山　そうなんです。「あの姉妹は格闘技が好きなんだ」とか勘違いされやすいと思うんですけど、そういうわけではなく、たまたまそういう家庭に生まれ、たまたま空道だっただけ。試合申し込み書って、普通は道場で「出場したい人は提出を」って配られるものだと思いますが、我が家では、着たら「出しとけよ」って。出たいとか、出たくないはない。あの審判の方をみるまで、そういう流れによって、試合に出場していたのが現実ですし、その後も「試合を積まなくてはいけない」という意識でした。我々姉妹からすると、なぜ自ら空道の世界に飛び込んできて競技に出ている女性がいるのか謎で「なんでやっているんですか」って訊いたことがあって、吉倉(千秋=2012春秋全日本優勝)さんに「これが好きだから」って言われて、顎が外れるくらい驚きました。「好きだからやっている人がいるんだ!」って。

— — その女性審判は、どなただったんでしょうか?

神山　分からないです。もし、今、お会いできるなら、お礼を申し上げたいです。91年頃から支部長にくっついて大会会場に行っていて、北斗旗が加藤(清尚)先輩だとかが激しく打撃を展開しあう時代の、審判も男性しかいないのが当然の風景を観て育ったので、女性の方が審判されているのをみて、光が差してみえて。中部本部の若い選手が「電話番号聞かなきゃ」ってヒソヒソ言うくらいカッコよくて。……だから、私も審判になったら、誰か電話番号くらい訊きに来てくれるかな?って思ったんですけど、誰も来ませんね…。

— — ……。その話は置いといて……その2001年以降も国内女子競技の成熟はなく、一方で、海外では女子競技のレベルの高い国もあり、2005年の第2回世界選手権では、正式に女子競技が行われました。その時は……。

神山　日本代表の第2補欠に選ばれて、東京での代表合宿などにも呼んでいただき、第1補欠までは出場枠が回ってきたんですが、私は出場できませんでした。当日、会場入りすることは求められて、一緒に稽古してきた仲間の試合を上(観客席)から眺めて。

— — それは辛い…。で、翌2006年春にようやく国内でも、全日本と冠した女子大会が開かれ、前原(映子)選手が初代王者となりました(前原はこの後、2008春秋・2009春・2013春秋も全日本優勝)。

神山　前原選手とはずーっと一緒に闘ってきました。……たぶん、私は女子史上、一番敗戦数の多い選手だと思います。ずーっと続けていて、いつも泣いている…そんな姿しか知らない方も多いと思います。

— — その第1回の全日本女子大会から、優勝する2010年の全日本女子までは、ずっと出て、ずっと負けていた?

神山　そうだと思います。常に無差別だったので、身体指数がいつもほかの選手より10くらいは下でした。しんどかったです。第3回世界選手権(2009年)の時は、全日本を獲ることもなく出場権を頂いたのですが、海外の選手と無差別で当たる顔面手技打撃有りの格闘技ほど過酷なものはないと感じました。体力指数差が20以上ある海外の選手との闘いは、今でも夢に出てくるほどです。でも、最後の試合となったウクライナのダリナ・イワノワとの試合は、投げられた後、キメ突きのアクションをされたとき、ハーフガードを維持していたのに、足が絡んでいるところが見えない角度にいるはずの副審が旗を挙げ、続いて他の審判も旗を挙げてしまったんですよ。それで、キメでの効果ポイントを取り返そうと、得意でもない投げを狙ってしまい…。まあ、イリーナ・ビコワ(2005年世界選手権優勝、2014年世界選手権準優勝のロシアのパワーファイター。2009年世界選手権は欠場)と当たってたら、たぶん死んでたんで、それくらいでよかったのかもしれません(苦笑)。それが24歳で、その翌年の2010年に全日本で初優勝させていただいたんですが、その頃にはもう、身体もボロボロで。身体が小さいことを理由にしてはいけないとは思いますが、やはり負担は大きかったと思います。腰を痛めて、痛みを取る処置だけをして、安静を命じられているのに、世界を目指して無理して稽古してしまったのがよくなかったのだと思います。その2010年だけは、春、秋と全日本を獲りましたが、もう身体が限界でした。

— — では、それからは試合に出ていない?

神山　2010年の秋の大会を制した後、ロシアで国際大会があって、出場権はあったのですが、(東)塾長から「これ以上は歩未にはやらせられない」とストップを頂いて、それ以来、試合には出ていません。競技者としては引退です。

— — で、翌2011年の全日本では、妹の喜未選手が優勝したわけですね。2人の妹とは何歳違い?

神山　3歳と8歳ですね。

— — お姉さんを観ていて、憧れて同じ王座を目指したんでしょうか?

神山　それは分からないですね。一人ひとりが自分の考えでやっていて、それを語り合ったりはしてこなかったですから。「お姉ちゃんが獲ったから私も」っていうことはないと思います。姉妹で性格も運動センスもそれぞれ違いますし。

— — どなたかダンスの巧い方がいらっしゃいましたよね?

神山　それは真ん中ですね。彼女は運動センスがよくて、見ただけでその動きが出来るタイプです。私は、何度も何度も反復練習して、ようやく少しずつ身についてくるタイプですね。三女は体格がよく、骨がしっかりしていて、ナチュラルに強い。

— — 三女の育未選手は1年前の2016年全日本体力別で、−215クラスの決勝に進出しました。

神山　頑張りましたよね。

— — サウスポースタイルからの左ストレートが切れていました。

神山　女子でストレートで一本勝ちしている選手は彼女くらいだと思います。手前味噌ですが。

— — 姉妹で試合したこともあったんですか?

神山　ありますよ!　2回か3回か。地区予選でもあたるし、涙が出ます。一番下の妹とも昇段審査で当たりました。勝っても気持ちが悪いし、負けたら辛い。きょうだいは本人たちが希望しない限り、組み合わせるべきではないですね。

— — 8歳離れた妹と殴り合い!

神山　観る側はきょうだい対決だとか、公開喧嘩だとかって、物珍し気に観るのかもしれないですけど、私たち姉妹は、支部長と母が厳しいのに対し、姉妹で寄り添って慰めあってきていただけに辛かった。ただ、1回だけ妹(喜未)に負けたのが、凄く稽古して調子が良いときで「なんでこんなに稽古して負けるんだ!」って悔しくて、それから心を鬼にして頑張れたのも確かです。最後の大会出場となった2010年秋も妹と当たり、勝ちました。

— — なんだかんだ言っても、姉妹対決の結果が向上に繋がっている面もあるじゃないですか(笑)。家族で取り組んでいるという背景は、心理的に負担ともなる分、励みにもなるんでしょうね。

神山　支部長は結果に拘るタイプではなかったですが、懸命に空道を発展させようと生徒を指導していましたから、支部長の娘として良い結果を残さなくてはいけないというプレッシャーを自分に掛けていました。そういう意味では世界を獲りたいとは思っていましたが、自分の器は自分が一番よく知っていますから……。

— — 厳しいお父さんがいると、たいてい、お母さんが旦那さんに「あなた、やりすぎよ…」とかって言って庇ってくれそうですが。

神山　それ、ホントに言いたいです。以前、大道塾のHPで神山支部長のことをマンガにして頂いたときに描かれているのでご存じの方も多いと思うんですけど支部長が大道塾に入門するときに「やるなら支部(道場)を開くところまでやりなさい」って言う女ですからね。

— — お母様は空道の経験はないんですよね。でも、やるなら、徹底的に。娘も甘やかすな、と。

神山　ええ。稽古に「行きたくない」って言うと「行きなさーい!!!」って。

— — で、そんな厳しい教育を受け、競技からは退いた後も、人間修養として空道を続けている、と。

神山　はい。今も週3は稽古しています。少年部の指導をしていますし、連盟のルール検討委員などの役職も頂いています。

— — そして、目標であった試合審判もされていますよね。「他の審判の挙げる旗をみてから同調するようなことがなく、自分の意志で毅然と旗を揚げているな」という印象があります。

神山　ありがとうございます。神山支部長から言われているのは、「ルールを熟知しているのは当然のこととして、なぜ今の判断としたのか、説明できるように」ということです。

— — 他の審判全員が自分の挙げた旗と反対の旗を挙げた場合など、自分の考え方は間違っているのか?　と悩みませんか。

神山　凹みます。ただ、たくさん経験させて頂いて、角度によって、見えない角度があるから割れるのだなと、理解しています。例えば、審判の位置が、マウントやニーインベリーからの疑似打撃を行っている際に、その攻撃が選手自身の背中に隠れる角度だった場合、その攻撃が十分なものとみなすべきなのか、あるいは直接打撃になっていないのかなど、見えないのだから、旗を揚げないという考え方もあると思うんです。

— — それは、ご自身のイワノワ戦があったからこその考察ですね。その考察に従えば、4方向に審判を配置していることの意義がよく分かります。

神山　そう思います。

— — 逆にいえば、イワノワ戦のときのように、旗を挙げるのが、他の審判の判断に流されてであっては、4方向に審判がいることの意味がなくなってしまう…。ところで、主審をされたこともあるんですか?

神山　あります。270+クラスの主審をやったときは、マウスピースのチェックで見上げ、体に青あざをつくりながら全身で止めに入る…という感じでした。

— — 猛獣みたいな体躯の二人が塊となって、移動しているところに割って入るわけですからね。

神山　怖かったです(苦笑)。

— — 「女子競技はこうあるべきだ」という、現状の扱いに対する要望はありますか?

神山　女子競技が大雑把なかたちで行われた頃から比べると、今の状況に不満はないです。ジュニア世代から試合経験を積めるチャンスも増えましたし、先日の体力別でようやく女子が階級別になり、トロフィーが2者に渡されたことに感動しました。

— — 2016年にして初めて女子は階級別になったんですね。

神山　そうです。体力指数によってリーグ戦を組む形はありましたが、結局、リーグ戦勝者同士が闘ってトロフィーは一つというかたちでした。

— — 今後、父から運営を姉妹で引き継いでいくという意志はありますか?

神山　分からないです。この世界に長くいて思うのはやっぱり〝男社会〟だということです。私には、男の人たちを率いていく技量がないし、器でもないと思います。

— — そんな組織の構造を変えていきたいという思いはないですか?

神山　日本の社会自体から変えていかないと変わらないと思います。文化人類学的観点からみても、難しいと思います。

そもそも男だから女だからとか 言っている時点で問題なんじゃないかな、と思います。

— — 文化人類学的……そういう研究をされているんでしたっけ?　そちらの道の経歴を詳しく教えていただけますか。

神山　愛知県の椙山女学園大学のコミュニケーション学部でコミュニケーション学を学び、名古屋大学の大学院に入ってから、文化人類学に出会いました。

— — 文化人類学とはどのようなものですか?

神山　日本だと民俗学と呼ばれていた……要は異文化、未開の地に入って行って、異なる文化・政治・経済等を研究する学問です。オーストラリアに語学留学していたことがあって、その時身に着けた語学能力を活かして、今はオセアニアの研究をしています。

— — オセアニアだと、やはり日本の社会と異なる文化がある?

神山　例えば、ニュージーランドでは、世界初の女性大統領が生まれたように、望むだけ女性が(社会的な地位において)上がれる文化があります。

— — 日本自体に、欧米と比べて〝男社会〟的なところがあるうえに、さらに武道界にもそういった傾向があるから、掛け算的に大きな問題となっているのかもしれませんね。

神山　問題はいっぱいありますね。柔道の溝口(紀子)さんの本とか読んでも、ああ、他の武道でも同じようなことがあるんだな、と思いました。

— — やはり、この国だと、過去の歴史においては、徒手武道は男性がやるものだという考えがあり、今もその名残があることも確かなんですよね。

神山　私は女の子を持ったら、武道という意味で、やらせます。武道が精神を鍛えるものだからこそ女性に有益だと思うんです。ニュージーランドと異なり、今の日本社会だとまだ女性が子育てのほとんどを担い、母子手帳はあるが父子手帳はない…。精神が強くなければ、子どもを育てられない環境だからこそ、ネグレクトの問題などが起きているのだと思うんです。試合で勝つとか、突き蹴りを出すという手段を学ぶことより、諦めない気持ちを身につけることは、男女なく必要なことなので、そもそも男だから女だからとか言っている時点で問題なんじゃないかな、と思います。

— — ぜひ、そちらのフィールドでも闘ってください。

神山　いや、闘えってよく言われるんですけど、逆に闘っちゃいけないと思うんです。マイノリティーはマイノリティーの戦略を練るべきだと。面と向かって闘っても、よい結果に結びつけるのは難しいですよ。

— — ところで、東塾長は娘の由美子さんが全日本王座を狙える選手になったことに関して「運動が好きな子じゃなかったから、競技をしろと言ったことはなかった。しかし、第4回世界大会から事務量の増大の為に、会社勤めを辞めさせ、事務局の一員として働かせたところ『現場を知らなければ』と始めたのが、ミイラ取りがなんとやらで…」と驚いていらっしゃいました。創業者と現場を繋ぐ意味では、良いことですよね?

神山　由美子さんが今後も関わってくれるなら、私は必死に支えます。お姉ちゃんだと思っているので。私たち姉妹よりずっと大きなプレッシャーを受けていらっしゃると思うので、私たちが由美子さんの気持ちが分かるなどとは思っていません。ただ、おこがましいですが、2世としてたまたまそこに生まれたという点で、近いということはあるのではないか、と。少しでも力になれれば、と思います!

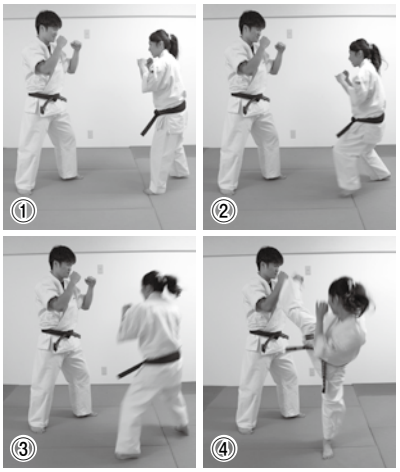
— — 締まりましたね!　よいインタビューになりました。ありがとうございました。では、お持ちいただけるようお願いした〝昔の写真〟見せていただけますか?

神山　はい(スペースの都合で紹介し切れませんが下写真他、何枚かをみせていただきました)。ホントは大学の卒業旅行でフランスに行ったとき、フランス支部で稽古した際の、若い頃の加藤久輝も一緒に写ってる写真も持ってきたかったんですけど…

— — 卒業旅行に道着を持って行って、稽古したんですか!?　それって、稽古嫌いの人がすることでしょうか?

神山(苦笑)。生活の一部過ぎて分からなかったけど…よくよく考えると好きなのかなぁ…。

20年ほど前の
神山信彦支部長(後列左端)と
歩未(前列右から二人目)と
喜未(後列右端)と
育未(前列左端)……合ってますかね?
筆者が推定で書いております…



「日進支部の特長は、基本・移動を大切にしていること。アップ程度にしか考えていない人も多いと思いますが、突き一つにしも、角度、足の向き、ガード、親指の位置、蹴りの体重のかけ方、ステップの位置…一人ひとりの体格や運動能力に合わせて、考えています。他の武道競技経験者がゼロでも、全日本選手権で優勝・入賞者を出せているのは、それが理由だと思います。一方で、優勝者を出すことより、出場した一人ひとりが1勝を挙げて、チーム賞を取ることに、むしろ大きな喜びを感じます。日進支部は、支部長を頂点に、お父さんがいて、弟がいて、妹がいて……と家族のような意識なんです。支部長は、優勝者を出すことより、勝った負けたより、逃げずに闘ったか、練習していることを出したかといった内容を重視します」と語る神山氏。基本・移動を重視して磨いた技術の例として、構えからサイドステップしての上段回し蹴り(1→4)を披露して頂いた

不定期連載 第2回

ウチの道場、こんな稽古をやってます!

大道塾総本部 ビジネスマンクラスの 週1回の稽古で 打・投・極を習得するための 〝4週でサイクルを組む〟メニュー

毎日稽古しているような支部ならともかく、設立したばかりで、稽古は週1回、初心者も黒帯もいる……そんな同好会の場合、打撃・投げ・寝技と多岐にわたって技術を高めねばならない空道の場合、どのように稽古メニューをデザインすればいいのだろう? そのヒントを求めて、週1回の稽古で、シニア大会上位入賞者を輩出し続けている、総本部ビジネスマンクラスを訪ね、松原隆一郎師範に、実施している内容について解説して頂いた。

■4週でサイクルを組むメニューの概要:

週1の稽古で、空道に必要な技術を身に着けるための工夫として、「ミット打ち」と「対人での技術研究」(下の4月15日の稽古内容の16:50〜と17:30〜部分)に関しては、毎週内容を変えて、4週で一巡するサイクルを組んでいる。

ミット打ちは…

1週目:内容を指定してのミット打ち
2週目:サンドバッグ打ち(4基サンドバッグを吊るし、6組で回す。余る二組はミット打ち)
3週目:心肺機能向上のためのミット連打(いわゆる「階段」など)
4週目:3週目と同じ

対人での技術研究は…

1週目:打撃
2週目:組んでの打撃
3週目:テイクダウン
4週目:寝技

…といった内容であり、土曜が5週ある月があったり、審査前は1ヵ月ほど集中して大道塾指定の準備体操や移動稽古や連続組手の確認を行ったりするため、「月の第〇週は△□を行う」といった具合に定まっているわけではない。また、移動稽古よりミット打ちを重視し、大道塾指定の準備運動でなくPNFなどを取り入れたペアストレッチに時間を費やすことで、中・高年でも身体の柔軟性を取り戻し、蹴り技が出せるようになるように、心掛けている。

■大道塾総本部ビジネスマンクラスのある日(4月15日=土)の稽古内容:

16:00〜 ■整列・黙想・始礼〜ストレッチ〜基本稽古〜ミーティング

※ストレッチにかんしては、大道塾指定の準備体操や移動稽古を行うのは審査前の時期のみ。通常は、身体の硬い中高年向けに、ターゲットを変えた動的ストレッチを行った後、基本稽古は規定通り。

16:40〜 ■(シャドー1分+インタバルに補強)×3ラウンド

※シャドー(写真①)は「1ラウンドめはステップワークのみ」など、内容を指定することもあり。補強は「拳立て20回+スタビライゼーショントレーニング(4種のピラーを10秒ずつ・写真②)」「腹筋」「頭を宙に浮かし、首を前後・左右に振っての鍛錬(写真③)」「前方ブリッジ(写真④)」「後方ブリッジ」など。

16:50〜 ■二人組になって内容を指定してのミット打ち

※ミット持ちは、キックミットと腹部パッドを着用。「ジャブ」「ジャブをスウェイしてワンツーを返す」「右ストレート」「右ストレートに対し、ヘッドスリップしながら右ストレート→左フックを返す」「右ストレート→左フック→右ミドル」「ワンツー→左ミドル」「右ロー→プッシュ→右ロー」「左フックをスウェイして右ストレート→左フック→右ヒザ→右ヒジ」……といったバリエーションを5本ずつ打たせ、交替(写真⑤⑥⑦)。最後には、2分×1ラウンド交替で、各々のミット持ちが次々と様々なオフェンス・ディフェンスを指定し、トレーニーは、随時、腹へのストッピングを織り交ぜながら、指示に対応する。この日の内容は、上記の4週サイクルの1週目にあたる。

17:20〜 ■休憩 拳・スネのサポーター着用

17:30〜 ■対人での技術研究

※師範が用意してきたメニューを実演→皆で反復練習。「相手のジャブをパリーし、右ヒザを出すフェイント掛けて、右足を前方に着地し、サウスポーになりつつ、左手で相手の左側頭部を押さえ、左ヒザ(写真⑧→⑨→⑩)」、「組み合いの状態でスネでシールドをつくり、崩しやヒザへ(写真⑪→⑫、⑬→⑭)をといったパターンのほか、「師範の投げ技の動きに合わせて、全員が〝エア〟で相応しい体捌きのリアクションを取る」(写真⑮)投げのディフェンス練習も行った。この日の内容は、上記の4週サイクルの2週目にあたる。

17:45～ ■シチュエーションスパー　20秒×先手後手交替×4本

※この日は「先手がワンツーを出し、後手がそれをディフェンスして組んだ状況」というシチュエーションから攻防をスタートした。技術研究で寝技を行った週は「1本目：袈裟固めから、2本目：ニーインベリーから、3本目：マウントから、4本目：バックマウントから」といった具合に、その週行った技術研究の内容に沿って行う。

17:55～ ■グローブ着用でのマススパー（写真⑯）　2分×1ラウンド

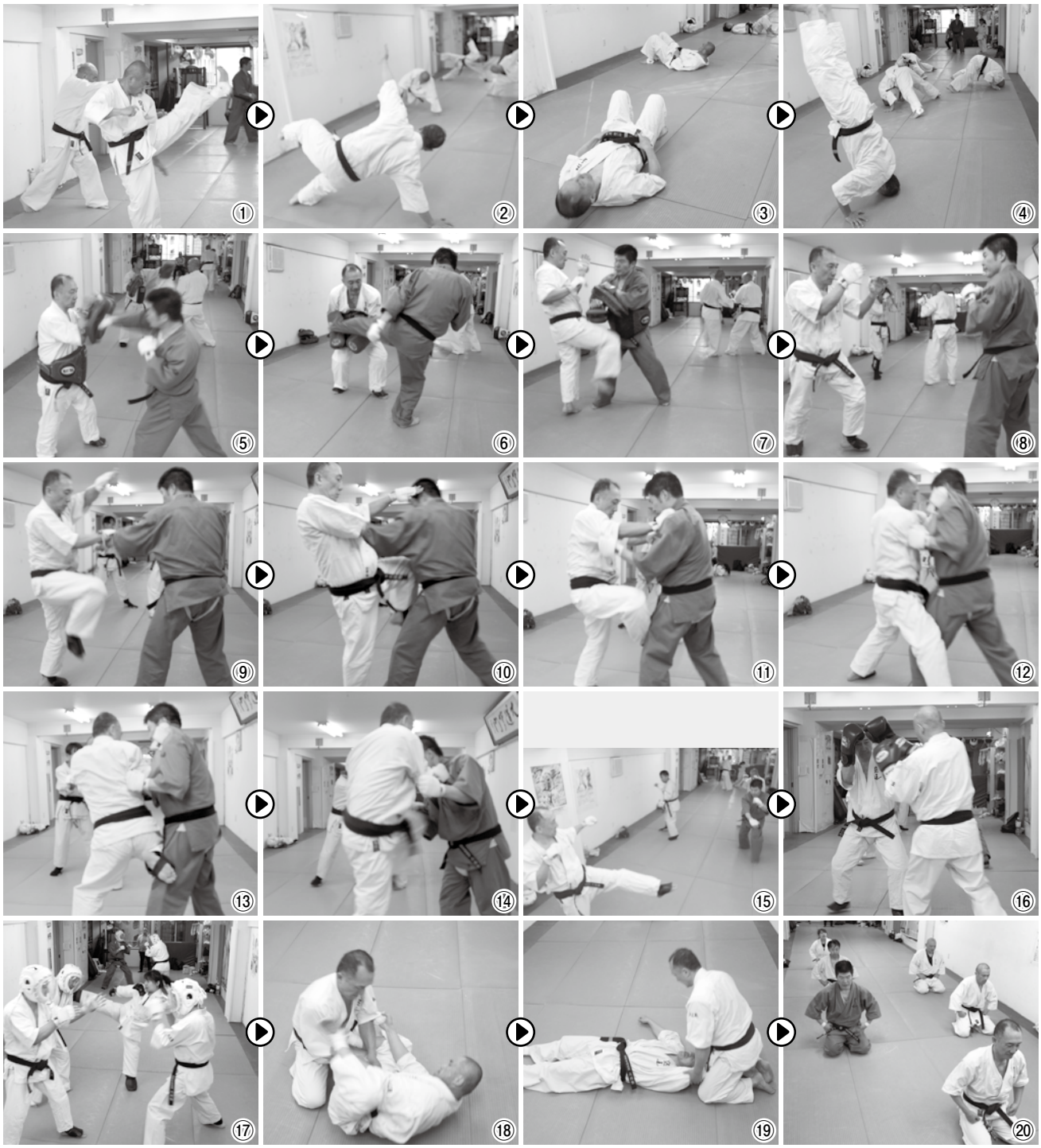
※最初からNHG着用で行うと、フックでの激しい打ち合いをしてしまいがちなので、1ラウンドだけグローブ着用で行い、丁寧な攻防を癖づける

■NHG着用でのマススパー（写真⑰）　1分×3ラウンド

■NHG着用で、組んだ状態からはじめ、ヒジ・ヒザ・頭突きの攻防を行うマススパー　1分×1ラウンド

18:15～ ■寝技スパー（写真⑱）　1分×上下ポジション交替×4ラウンド

18:20～ ■輪になって道場内歩行～ペアでストレッチ（写真⑲）～道場訓唱和・黙想（写真⑳）・終礼

18:30　稽古終了

※この後、1～2時間、居残りで自主練習（有志でのマススパーなど）を行う人が多いとのこと。
※初心者の指導は、黒帯の会員が時間交替で本隊の稽古から外れ、行う。